

# 「経絡」拾遺—動脈・血脈—

報 告

秩父市 大友内科医院

大友 一夫

上野が桜でにぎわう前に、国立科学博物館での特別展「医は仁術」（平成26年3月15日～6月15日）を見学して来た。ヒポクラテスや神農を始め、江戸期の医者（吉益東洞、山脇東洋、華岡青洲など）のカラーの肖像画や近代医学を彩った面々の写真も展示されている。世界初の乳癌麻酔手術を手掛けた華岡青洲は意外に思慮深い現代的な風貌をしていた。秩父にも縁の深い佐藤泰然（母は秩父出身）の実子・松本良順や養子・佐藤尚中も大きく取り上げられている。

ただ今回の特別展で目を引いたのは解剖に関する展示であった。

前号『おけら』8号の『阿蘭陀経絡筋脉臟腑図解』の経絡で、筆者は解剖の歴史を取り上げたが、それらを反芻咀嚼する思いで見回った。まずレメリンの『小宇宙鑑』（オランダ語版）である。これは秩父の西田氏蔵のもの（ラテン語版）と同じで、男体図の右下には十字架のキリスト像が描かれている。その写本である『和蘭全軀内外分合図』と『驗號』（解説書）もある。これはかつては長瀬総合博物館にもあったが、今は所在不明で目

にすることができなかったものである。ここにも「中焦ヲ順経絡之図」があり、きれいに脈管が模写してあった（図1）。『ターヘルアナトミア』のオランダ語版も展示されており、思った以上に分厚い本である。また山脇東洋の『蔵志』や河口信任の『解屍編』も色刷りの本物である。なお平野革谿（元良、重誠）の『とりあげば心得草』に載る「胞衣包胎膜及臍帯連続之図」の原図は、手持ちの白黒のコピーと違って、ピンクに彩色されていた。

そんな中で最も目を見張ったのは、穂積惟正（ほづみいせい）（之供、淡斎老師）の『視死別生図絵』である。

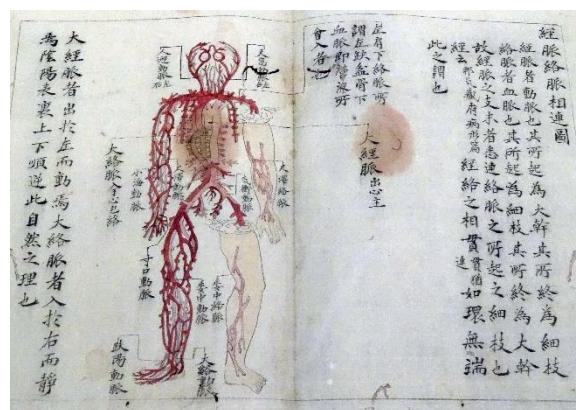


図2 『視死別生図絵』

展示されているページには「経脈絡脈相連図」（図2）とあり、その説明に、「経脈者動脈也。其所起為大幹、其所終為細枝。絡脈者血脈也。其所起為細枝、其所終為大幹。故経脈之支末者悉連絡脈之所起之細枝也。経云経絡之相貫如環無端此之謂也」とあった。経脈は動脈、絡脈は血脈と断定しているのではないか。杉田玄白の『解体新書』でも動脈と血脈が対になって語られているように、血脈は今の静脈を指している。その経脈（動脈）は大幹に発して細枝に至り、絡脈（血脈）は細枝に発して大幹に至る。つまり経脈と絡脈は末端で繋がっており、古典で言うように、経絡は相連な



図1 『和蘭全軀内外分合図』

って端なく循環しているとは、このことを指しているのだと解説している。なおこの図には、大経脈（大動脈を表す）と大絡脈（大静脈を表す）も図示されている。やはり経絡は脈管であると認識していたのである。前号で紹介した藤井尚久先生もこの図を見ていたのであろうか。ただ筆者は、前号で述べたように、絡脈は体表に現れた静脈ではあるが、経脈は橈骨動脈クラスの太さの動脈でも静脈でもよいと認識している。中央から四肢末端に至る動脈は、手ならば陰経の脈、足ならば陽経の脈であり、逆に末端から中央に向かう静脈は、手ならば陽経の脈、足ならば陰経の脈と捉えている。また『黄帝内経』でいう“経隧”こそ大動脈や大静脈を指していると思っている。

さて穂積惟正は上毛出身で文政（1818～1829年）の頃の人と言われており、『扁鵲伝註』『医経撥乱』『雑病知新』『神農本経温故』『冊正黄帝脉書』『冊正扁鵲脉書』『傷寒論反正』『四診論要』『洪範温故』などの著もあり、考証学的素養のあった人だと思われる。なお『扁鵲伝註』は別名『傷寒雑病論集』とも称し、傷寒論序文の注釈書の色彩が濃く、山田正珍の説も取り入れている。ただ『視死別生図絵』がいつ書かれたかははっきりしない。恐らくこのころ蘭学に関心を持った医者は、すでに経脈は動脈、絡脈は静脈という認識は存在していたのかもしれない。「医は仁術」の会場には、他に『施薬院男解体臓図』（1798年に三雲環善が指導した解剖図で、本邦解剖図中最も精密なものの一つである）も展示されていた。その心臓を取り巻く血管の図に、動脈大幹（大動脈を表す）、血脉大幹（大静脈を表す）、肺動脈、肺血脉（肺静脈を表す）が表記されており（図3）、『解体新書』（1774年）の動脈、血脉を踏襲している。

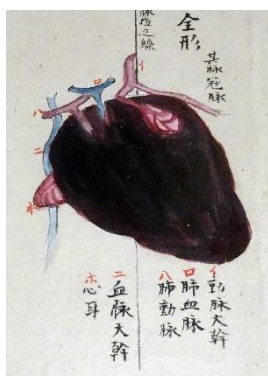


図3 『施薬院男解体臓図』

ところで山田正珍（図南、宗俊）も動脈、血脉の語を使用している。彼の著した『傷寒論集成』（1792年）の「凡厥者、陰陽氣不相順接便為厥、厥者手足逆冷是也」の解説に、「陰陽の氣、相順接せずとは、血氣否塞して外降し能はざるをいふ。所謂天地交はらざれば否すと、これなり。嘗て和蘭解剖の書を考うるに、人身血行の道は二、その一は心臓に起こり以て周身に順行す、これを動脈という。その一は動脈の尽くる所より起こり、動脈の血を受け逆行して還り心に入る。これを血脉という。更に出で更に入り環の端なきが如く然り。もし否塞する所あれば即ち出づるもの入らず、入るもの出でず、厥逆ここに於てか発し、脈動ここに於いてか絶し遂に乃ち死に至る。所謂陰陽の二字、けだし動脈血脉これなり」とある。山田は“陰陽氣不相順接便為厥”を、心→動脈→血脉→心と端なく巡行する血行に、塞ぐところがあれば厥逆が発生すると翻訳したのである。つまりこの場合の陰陽を西洋医学でいう脈管で説明しようと試みた。山田は杉田玄白を友人の一人に挙げているので、『解体新書』に載る「動脈、血脉」のことも知っていたのである。また先の穂積は山田の『傷寒論集成』を読んでいるので、さらにその考えを押し進めて、「経脈は動脈、絡脈は血脉」と規定したのであろう。

江戸時代の医者にとって、西欧の解剖書の出現はかなりインパクトの強いものであったに違いない。これまで培って来た東洋医学の概念や、古医書の内容とは一体何であったのか自問自答したことであろう。それでも西洋医学を無視してこれまでの漢方のままでよいとする者、漢方的やり方はそのままにして西洋医学の良いところは取り入れようとする者、漢方を西洋医学的に解釈しようとする者、果ては漢方を古い医学として遺棄する者まで現れても不思議ではない。筆者は杉田玄白が『解体新書』を著した年、即ち1774年に、当時の医者がそれに対してどんな態度を取ったか興味を覚えた。ただ今回は時間がないので、それぞれの医者が何歳であったかをここに列挙し、彼らの眼差しで思い描いてみようと思う。

賀川玄悦 74歳、山脇東洋 69歳、前野良沢 51歳、中西深斎 50歳、福井楓亭 49歳、小野蘭山 45

歳、本居宣長 44 歳、杉田玄白 41 歳、村井琴山 41 歳、山脇東門 38 歳、津田玄仙 37 歳、和田東郭 31 歳、中神琴溪 30 歳、山田正珍 25 歳？、吉益南涯 24 歳、片倉鶴陵 23 歳、原南陽 21 歳、橘南谿 21 歳、丹波玄簡 19 歳、大槻玄沢 18 歳、華岡青洲 14 歳、

エピローグ：

特別展「医は仁術」では、三脚やフラッシュを使用しなければ撮影可能とあった。滅多にないことなので喜んだが肝心のカメラがない。このときスマホを持っていることに気づいた。ただし、まだカメラとして使用したことはなかったのである。そもそもスマホは上さんに「今から帰る」という電話で使うか、スケジュールに利用するだけだった。メールもしたことがなく、スマホ機能の万分の一も応用できていない。早速暗い会場でシャッターらしきところを押しながら撮り続けた。ただし手ごたえが少ないとは感じていた。穂積惟正の「経脈者動脈也。絡脈者血脈也。」を見つけたときには高鳴る胸を静めながらガラス越しに何枚もシャッターを切った。さて帰宅してスマホを操作すると一枚も撮れていないことを知って愕然と

した。そこで4月中旬、花見の時期を過ぎたころカメラを持って再度国立科学博物館を訪ねたのである。今度はうまく撮れていた。このとき展示内容を収めた冊子も買い求めた。するとこの冊子には、それこそ穂積惟正の『視死別生図絵』だけ(?) 抜け落ちていたのである。しかも展示物では「経脈絡脈相連図」のページが開かれていたのであるから、筆者のこの報告のために仕組まれた神慮と思わざるをえない。逆に展示で見た『和蘭全軀内外分合図』には「中焦ヲ順経絡之図」は供覧されていなかったが、冊子には写し出されていたのである。全く幸運であった。

今回、穂積惟正なる医者を知った。彼が『扁鵲伝註』で、傷寒論の序文を解説するとき、山田正珍(図南)の説を取り上げていることを見いだしたが、この奇遇にも驚いた。筆者は今号の『おけら』から、傷寒卒病論の解説を始めたので、参考にしていただきたい。

また、「医は仁術」の特別展は6月15日まで開催されているので、解剖の歴史に関心のある方はぜひ足を運ばれることをお勧めする。そして「経脈者動脈也。絡脈者血脈也」の一文を発見すれば、筆者と同じ感興を抱いていただけたらと思っている。

## 次号特集「私の<sup>しおり</sup>栞」原稿募集

次号で『おけら』創刊10号を記念して、特集を組む予定です。

題材は「私の<sup>しおり</sup>栞」です。東洋医学を学ぶに際し、手引きとなった書物、座右に置く名著、印象に残った論文、人に薦めたい本などがありましたら、5つ挙げ、簡単なコメントを添えていただきたいと思います。

読者諸兄全員からの投稿をお待ちしています。

締め切りは平成26年8月末日と致しますのでよろしくお願いします。

『おけら』編集部